

Title	東洋史学の回顧と展望 (一九九一年～二〇二一年六月)
Sub Title	Review and outlook of Asian and Middle Eastern history studies
Author	岩間, 一弘(Iwama, Kazuhiro) 長谷部, 史彦(Hasebe, Fumihiko)
Publisher	三田史学会
Publication year	2022
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.91, No.1/2 (2022. 9) ,p.121 (121)- 136 (136)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	2021年度三田史学会大会総合部会シンポジウム報告：『史学』一〇〇年の総括と展望
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20220900-0121">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20220900-0121</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 東洋史学の回顧と展望（一九九一年～二〇二一年六月）

岩間一弘・長谷部史彦

一九九一年から二〇二一年六月現在までの三〇年間に  
おいて、『史学』に掲載された東洋史学分野に関連する  
研究論文は、数え方によって若干異なってくるが、約一  
五〇篇に及ぶ。本分野の研究対象地域は、おもに東アジ  
アと中東・イスラーム世界とに大別できる。

### 【東アジア史】

このうち、東アジア史に関する論文（研究ノートや史  
料翻訳などを含み、書評はのぞく）は、計九二篇であつ  
た。そしてそのほとんどは、中国史に関するものであり、  
本塾東洋史学専攻・東アジア史の三つの学統に対応して、  
「古代史」「中・近世史」「近・現代史」に大分できる。  
以下ではそれぞれについて概観したい。

第一に、中国古代史に関する論考は、一九九〇年代か

ら二〇〇〇年代にかけて比較的多く発表されている。い  
ずれも、伊藤清司氏とその門下生の論考であり、桐本東  
太氏による「市」や「降服」の斬新な解釈、市瀬智紀氏  
による楚国の民族系統論争に関する論説、森雅子氏によ  
る『穆天子伝』や黄帝神話の起源を古代オリエントなど  
に探る研究をはじめとして、政治制度史や社会経済史と  
は一線を画した文学や民俗学に近いユニークなテーマの  
研究論文が並ぶ。

また、文化人類学者の鈴木正崇氏による中国の広西壮  
族自治区・貴州省の少数民族にまつわる慣習・伝承の研  
究も、同様の関心を共有している。慶應義塾大学におけ  
る中国古代神話・伝承の研究は、一九九七年に開かれた  
「シンポジウム 中国神話学の現在」が一つの到達点であ  
る。さらにその後もひき続き、『春秋左氏伝』『穆天子

伝』などが熱心に解説・翻訳され、李福清氏による神話研究の論文も掲載されている。また、日本の出土史料の図柄を『山海経』を図案化したものだと推察する桐本東太氏・長谷山彰氏の説も発表された。

さらに、齋藤道子氏や水野卓氏によって、文化的な観点から古代国家論・君主論が精力的に展開されてきた。吉田章人氏による平丘の盟をめぐる魯・晋関係の研究もある。また、原宗子氏や村松弘一氏による環境史研究も、貴重な成果である。ほかにも、武者章氏による青銅器等から西周王権の支配構造を探る研究、崎川隆氏による甲骨文字の研究、栗山知之氏による黄河中流・祝家荘の「土壕」（人工の窪地）の調査などがある。

第二に、中国中・近世に関わる研究論文は、この三〇年間途切れることなく発表されてきており、時代やテーマが多岐に及んでいる。そうしたなかで、時代としては和田博徳氏らの学統のある明清時代、テーマとしては地域社会史の研究成果が目立つ。

徽州文書に関して、山本英史氏による契約文書の研究があり、さらに渋谷裕子氏が、徽州文書と日記を照合して生員の農村社会での交際活動を考察するなどしている。また、中間和洋氏による台南の移民社会における漢族エ

リート層の形成に関する研究、福建の宗族における風水林の意味を探った魏郁欣氏の研究、広東省惠州府において鉱盗問題に対応して高まった地方意識に関する唐立宗氏の研究など、多くの成果を得ている。

さらに、明代に関しては、浅井紀氏が、民間宗教・羅教の支派・靈山正派の教義の特質を明らかにしたり、浙江東部の士大夫の儒教・仏教から明朝の礼楽制度を考察したりしている。また、可児弘明氏は、朝鮮の役で日本に連行された孟二寛とその後裔について明らかにしている。安廷苑氏は、明末のカトリック教会史料に表れた中国の婚姻問題を論じている。清代に関しては、林淑美氏が、「客」を付けて呼ばれる人々に注目して台湾移住民社会を論じ、上田裕之氏が、清朝による官鑄銅錢供給の政策意図、そのための黄銅器皿の製造・所有禁止について論じた。

ほかにも、日本・中国・朝鮮などの文字表記を比較検討した金文京氏の論考、南宋後期の政治抗争と理宗親政の成立過程を検証した小林晃氏の論文などもある。

第三に、中国近・現代史についてみると、『史学』では、一九九七年に山本真氏「抗日戦争期から国共内戦期にかけての鄉村建設運動」（六六巻四号）が掲載されて

以降、清末および中華民国時代に関する研究成果が頻繁に発表されるようになった。とくに当初は、上述の明清史研究の影響もあって、地域社会・地域エリートに関する研究成果が目立ち、それに関しては、佐藤仁史氏・夏永氏・山本英史氏による江南・蘇州、山本真氏による福建省、渋谷裕子氏の台湾・澎湖県に焦点を当てた論文などが重要である。

さらに、清末に関しては、菊池秀明氏による太平天国研究と、持田洋平氏によるシンガポール華人社会史研究がある。また、民国期に関しては、共産党の抗日根拠地の経済建設を考察した一谷和郎氏、上海の日系製革企業を分析した吉田建一郎氏、天津YMCAの関連史料を紹介し地域社会史におけるその有用性を論じた戸部健氏、日中戦争期の中国ムスリムの宗教活動や憲政運動を明らかにした矢久保典良氏、日本の侵攻に対する重慶国民政府の軍事委員会の対応を検証した藤井元博氏、新疆の盛世才政権の民族政策を論じた木下恵二氏、広東の陳炯明政権を考察した若泉もえな氏の論考など、多くの研究成果が発表されている。

くわえて、女性史に関して、周一川氏による日本への中国人女子留學生の研究、岩間一弘による都市中間層女

性の結婚と就業に関する研究が発表されている。鉄道建設について、佐野実が清末の滬杭甬鉄道、大野絢也が南京国民政府期の粵漢鉄道を緻密に考察した。

そして、近代東アジアに拡張した日本帝国圏の食文化交流について二〇二〇年にシンポジウムが開かれて、近代日本の下層社会と植民地における救荒作物・さつまいもの歴史をたどった藤原辰史氏の論考などが発表された。ほかにも満洲に関しては、湯川真樹江氏による満鉄農事試験場の研究、菅野智博氏による雇農農家の実態に関する研究も発表されている。

中国以外にも、近世の朝鮮半島およびベトナムに関する論文がある。可児弘明氏は、朝鮮半島のタコおよび葦魚について、古田博司氏は埋葬法について論じている。

また、和田正彦氏は、松本信廣氏が収集し慶應義塾大学図書館に収蔵された「安南本」を紹介している。これらは、上述した古代神話研究と同じく、松本信廣氏以来の民族学的なアジア史研究の系譜に連なるものである。

さらに、近世・近代の南アジア海域については、二〇一二年に吉原和男氏がコーディネートした講演会「南アジア海域の人の国際移動―インド人と中国人」の論考がある。重松伸司氏が、一九世紀のペナン島ジョージタウ

ンにおける華人系・インド系の人々の定住過程と居住空間の変動を論じた、また、上田信氏は、鄭和が南シナ海・インド洋海域の港市にハナフィー派中国系ムスリムを長官として配置して、そのことがマラッカ王国などのイスラーム化の一因になったという仮説を示している。両氏の論考は、東南アジアにおける印僑・華僑の社会・文化関係の歴史の変遷など、重要な研究領域を切り開いていけるものである。

以上のように、この三〇年間に『史学』に掲載された東洋史学・東アジア史の研究論文を振り返ると、古代史の論文が減少傾向にあり、近・現代史の論文が増加傾向にあることがわかる。すなわち、一九九〇年代には古代史が東アジア史の論文の過半数を占めたが、二〇一〇年代には近現代史の論文が過半数を占めるようになった。このことは、中国史への一般的な関心が、『史記』や『三国志』といった古典世界だけでなく、急速な経済発展を遂げてさらなる強国化をめざす現代中国にも向けられてきていることと無関係ではなからう。

最後に、こうした現況を踏まえて、今後の中国の「古代史」「中・近世史」「近・現代史」研究の課題をそれぞれ挙げておきたい。古代史に関しては、古典文献の再解

釈を基礎としつつも、近年の都市開発のなかで新たに出土している文字・文物史料を研究することが求められている。また、先秦・秦・漢時代に遡れる伝承や習俗が、後代にどのように利用され、変遷してきたのかを検証する研究も依然有意義ではなからうか。

中・近世史に関しては、『史学』で蓄積されてきた地域社会史研究を土台として、都市史・女性史・風俗史・宗教史などが、さらに発展していくことが期待される。また、漢籍資料の紹介や翻訳が、ひきつづき重要な意味を持つであろう。

近・現代史については、近年活況を呈している清末・民国期の社会経済史にくわえて、対外関係・対外交流史の研究や、さらに時代を下って中華人民共和国の歴史研究が積極的に発表されていくことが望ましい。これらにくわえて、日本と中国の関係・交流史はもちろん、朝鮮半島、東南アジア、南アジアを視野に入れた研究も継続されていくことを期待したい。

### 【中東・イスラーム世界史】

中東・イスラーム世界史に関していえば、『史学』五九巻から八九巻まで、一九九〇年から二〇二〇年に至る

時期に、この地域を対象とした論文は研究動向やシンポジウム記録などを含めて計五七篇にのぼる。ここでは、それらを一九九〇年代、二〇〇〇年代、二〇一〇年以降の三つの時期に分けて、各時期の傾向性を読み解き、それぞれの特徴について考えてみたい。

まず一九九〇年代について、論文数一二篇は、二〇〇〇年代や二〇一〇年代に比べて少なく、全五七篇の約二%にとどまっている。しかし、当該分野を専門とする三田史学会員たちの研究活動が低調であったわけではない。むしろ、一九八〇年代から続く隆盛期と位置づけてよいだろう。一九九〇年代には、①当該の学界全体において「都市性」などをテーマに掲げた大小の研究プロジェクトが他分野・他地域の専門研究者たちをも巻き込むかたちで活況を呈し、それらの枠内での三田史学会会員の成果公表が多かったこと、②中東やイスラーム世界史に関する、いわゆる「講座もの」などの出版企画が相次ぎ、そのなかでの論文公表が少なくなかったこと、③『日本中東学会年報』・『イスラーム世界』・『オリエント』などの当該分野の国内学会誌を舞台にした三田史学会員の活躍がみられたこと、などの点に留意する必要があるだろう。

東洋史学の回顧と展望（一九九一年～二〇二二年六月）

そうしたなかで特に注目されるのは、日本におけるイスラームの歴史的研究の「老舗」と呼ばれることもある本塾の当該分野研究を、巨視的に回顧し、その特質について詳論したシンポジウムの記録、坂本勉・三木亘の両氏による「イスラーム研究の系譜と慶應義塾（一）・（二）」である。ここでは、本塾のイスラーム世界史研究の源泉であり、そのスケールの大きさにもかかわらず、歴史上の個々人の姿や思いを柔らかい筆致で生き生きと描き出す前嶋信次氏の「前嶋史学」について、坂本氏が日本のイスラーム研究史のなかにこれを明快に位置付け、さらに三木氏が独特の視座から補足とコメントを加えられている。東洋史における「東」と「西」の垣根を超えた自由な座談会の記録も収められており、本学会の若い世代にもぜひ精読してもらいたい濃密かつ貴重な内容を備えている。また、その三年後の『史学』には、在職中に三木氏が提唱されていた「文明語」という概念を援用し、東アジア・オスマン帝国・ヨーロッパの比較文明史的な考察を試みたシンポジウムの成果である、鈴木董氏らの論考も収載されている。それらは今日的視座からみても実に独創的な内容を示しており、特筆に値するといえよう。

一二五（一二五）

続く二〇〇〇年代には、一七篇、全体の約三〇%の論文が確認されるが、それらは前嶋門下の諸氏の指導を受けた「第三世代」の研究者たちによる、アラビア語・トルコ語・ペルシア語史料の精細な分析に基づいた創意豊かな論攷群であり、政治の思想や体制、同職組合、ウラマー、出版文化、医療、地方都市の社会、東南アジアのアラブ人コミュニティなど多彩なテーマをそれぞれ独自のやりかたで掘り下げた成果といえる。大勢を占めるのはオスマン帝国とイランに関する論文であるが、トルコ人研究者による日本語論文も二篇含まれており、『史学』の国際性向上への貢献も認められる。また、東洋史学専攻が企画した二〇〇〇年のシンポジウムの成果が、通例の『史学』における活字化ではなく、三田史学会七〇周年記念事業の支援を受けて、『中世環地中海圏都市の救済』として大学出版会から公刊されたことも付記しておきたい。

二〇一〇年から二〇二〇年までの時期には、二八篇、全体の約四九%、つまりこの約三〇年間の掲載論文の半分に迫る、数多くの論文が『史学』で公表された。『史学』についてみれば、本塾の中東・イスラーム世界史研究の全面的開花の時期といっても過言ではない。そこで

の内容的な特徴の一つは、「都市」に的を絞った研究が主流をなしているという点である。日本における中東都市社会史研究を開拓された湯川武、坂本勉両氏の影響がそこにみて取れよう。また、「個人」に照準を定め、新たな研究視角からその歴史の実態の解明に力を注いだ論文が散見される点に、「前嶋史学」の伝統の継承と発展もみることができよう。その意味で、この時期の開始時点に位置する二〇一〇年の『史学』七九巻四号に、坂本勉、杉田英明、家島彦一の各氏による三田史学会のシンポジウム「井筒俊彦と前嶋信次―日本におけるイスラーム研究の源流を探る」の記録が掲載されていることは、実に象徴的である。官学的アカデミズムから自由な、そして日本の当該分野研究においてユニークなその特質を保持し、さらなる展開をたえず模索しながら、世界の当該研究の最先端を見据えて新たな研究成果を生み出してゆくことこそが、今後進むべき方向であるといえよう。

東洋史学関連文献一覽（一九九一年～二〇二二年六月）

「中国古代」計三二篇（史料翻訳を含む）

\*一九九〇年代

伊藤清司「民族学・フォークロア・東洋史学のはざまで」

（六〇巻二／三号、一九九一年）

伊藤清司「東アジア民間説話の比較研究」（六一巻一／

二号、一九九一年）

齋藤道子「春秋諸侯の国内掌握」（六二巻四号、一九九

三年）

原 宗子「『管子』地員篇の山と丘陵地帯」（六三巻一／

二号、一九九三年）

市瀬智紀「蛮夷の華夏起源伝承の研究―中国古代楚族

源論争を中心に」（六三巻三号、一九九四年）

齋藤道子「鄭公鍾儀考―古代中国における政治権力と音

楽をめぐる一風景」（六四巻三／四号、一九九五年）

桐本東太「中国古代における市の位相」（六四巻三／四

号、一九九五年）

茂澤方尚「I・A・リチャズ著『孟子の心性論』抄訳」

（六四巻三／四号、一九九五年）

鈴木正崇「銅鼓の儀礼と世界観についての一考察―中

国・広西壮族自治区の白褲瑤の事例から」（六四巻三／四号、一九九五年）

森 雅子「穆王讚歌」（六五巻一／二号、一九九五年）

伊藤清司「シンポジウム 中国神話学の現在 中国神話

研究の動向と三論文の位置づけ」（六六巻四号、一九

九七年）

金文京「中国民間文学と神話伝説研究―敦煌本「前漢

劉家太子伝（変）」を例として」（六六巻四号、一九九

七年）

谷野典之「湖北省神農架の漢族の創世神話―『黒暗伝』

考」（六六巻四号、一九九七年）

森 雅子「黄帝伝説異聞」（六六巻四号、一九九七年）

\*二〇〇〇年代

桐本東太・長谷山彰「『山海経』と木簡―下ノ西遺跡出

土の絵画板をめぐる」（七〇巻二号、二〇〇一年）

村松弘一「魏晋期淮北平原の地域開発―咸寧四年杜預上

疏の検討」（七〇巻三／四号、二〇〇一年）

水野 卓「春秋時代の君主―君主の殺害・出奔・捕虜の

検討から」（七一巻二／三号、二〇〇二年）

崎川 隆「書体分析による甲骨文字契刻者組織の復元」

(七一巻二／三号、二〇〇二年)

武者 章「西周王権と王統譜」(七五巻二号、二〇〇六年)

李福清(桐本東太訳)「新たに中国で採集された神話

伝説」(七六巻二／三号、二〇〇七年)

富田美智江「『左伝』賦詩と春秋時代の『詩』」(七七巻

二／三号、二〇〇八年)

水野 卓「春秋時代の諸侯即位―『左伝』に見える

「立」「即位」「葬」と新君誕生の認識との関係から」

(七八巻一／二号、二〇〇九年)

栗山知之「歴史資料としての土壕―渭河平原西部、祝家

荘における調査成果」(七八巻一／二号、二〇〇九年)

桐本東太「降服考」(七八巻三号、二〇〇九年)

\*二〇一〇年代

桐本東太・岡本真則・島田翔太・富田美智江他「『穆天

子伝』訳注稿(一)」(八〇巻四号、二〇一一年)

桐本東太・水野卓・川村潮・森和・吉田章人・矢島明希

子他「『穆天子伝』訳注稿(二)」(八二巻一／二、二

〇一三年)

桐本東太・森和・矢島明希子・川村潮・吉田章人「『穆

天子伝』訳注稿(三)」(八三巻一号、二〇一四年)

鈴木正崇「中国貴州省・水族の民族文化に関する一考察

―端節・銅鼓・水書を中心に」(八四巻一／二／三／

四号、二〇一四年)

原 宗子「『左伝』所述「爰田」考―環境史の立場か

ら」(八四巻一／二／三／四号、二〇一四年)

矢島明希子「ふくろうのイメージと不孝についての一試

論―五月との関係から」(八四巻一／二／三／四号、

二〇一四年)

吉田章人「平丘の盟から見た魯・晋関係」(八四巻一／

二／三／四号、二〇一四年)

桐本東太・島田翔太・富田美智子・水野卓・吉田章人・

矢島明希子・川村潮・森和「『穆天子伝』訳注稿

(四)」(八六巻四号、二〇一七年)

「中国中・近世」計二四篇

\*一九九〇年代

浅井 紀「羅教の支派―靈山正派」(六三巻三号、一九

九四年)

金文京「漢字文化圏の文字と生活」(六三巻三号、一

九九四年)

太田次男「白詩唐代鈔本について―『坎曼尔詩箋』(『賣

炭翁)を繞って」(六三卷四号、一九九四年)

楊 鎌(和田浩平訳)『坎曼尔詩箋』辨偽」(六三卷四号、一九九四年)

楊 鎌(和田浩平訳)「西域の歴史地理研究と『坎曼尔詩箋』の真偽」(六四卷二号、一九九五年)

尾崎 康「北京図書館蔵正史宋元版解題抄」正史宋元版の研究」補訂」(六四卷三／四号、一九九五年)

渋谷裕子「清代徽州農村社会における生員のコミュニティについて」(六四卷三／四号、一九九五年)

山本英史「明清黔西遞胡氏契約文書の検討」(六五卷三号、一九九六年)

渋谷裕子「徽州文書にみられる「会」組織について」(六七卷一号、一九九七年)

#### \*二〇〇〇年代

中間和洋「清代台南地方における漢族エリート形成過程について」(七〇卷三／四号、二〇〇一年)

渋谷裕子「安徽省休寧県龍田郷涪田嶺村における山林経営方式の特徴―清嘉慶年間と現在を中心として」(七一巻四号、二〇〇二年)

巴 兆 祥(山本英史訳)「日本の大学図書館における中

国地方志調査記」(七一巻四号、二〇〇二年)

安廷苑「明末の中国カトリック教会における婚姻問題について」(七二巻二号、二〇〇三年)

山本英史「中国歴史文献収蔵機関情報―北京・江南・台湾」(七三巻一号、二〇〇四年)

林 淑美「清代台湾移住民社会の「客」と「土著」」(七四巻一／二号、二〇〇五年)

可児弘明「孟二寛とその後裔」(七四巻四号、二〇〇六年)

可児弘明「孟二寛とその後裔―補遺」(七五巻二／三号、二〇〇七年)

上田裕之「清初各省の制錢供給政策―銀の時代の清朝と銅錢」(七五巻一号、二〇〇六年)

唐立宗(太田出訳)「地方輿論の形成―明代広東省惠州府と『定氛外史』」(七七巻一号、二〇〇八年)

山本英史「清康熙の孤本公牘三種について」(七七巻四号、二〇〇九年)

#### \*二〇一〇年代

小林 晃「南宋理宗朝前期における二つの政治抗争―『四明文獻』から見た理宗親政の成立過程」(七九巻四

号、二〇一〇年)

上田裕之「清代雍正年間における銅禁政策と京局辦銅」

(八五巻四号、二〇一六年)

浅井 紀「宋元明代の浙東士大夫と仏教」(八七巻一／

二号、二〇一七年)

魏郁欣「明代福建の宗族と風水林―万木林説話をめぐ

つて」(八七巻一／二号、二〇一七年)

「中国近・現代」計二九篇

\*一九九〇年代

山本 真「抗日戦争期から国共内戦期にかけての郷村建

設運動―中華平民教育促進会の郷村建設学院と華西実

験区を中心として」(六六巻四号、一九九七年)

周一川「中国人女子留学生を受け入れた官立三校につ

いて」(六七巻一号、一九九七年)

周一川「中国人女子留学生を受け入れた私立三校につ

いて―民国初期を中心に」(六八巻三／四号、一九九

九年)

\*二〇〇〇年代

佐藤仁史「近代江南地域史研究の成果と課題―小田「朱

小田」氏の江南郷鎮社会史研究によせて」(六九巻

三／四号、二〇〇〇年)

一谷和郎「国共内戦期晋察冀辺区の経済建設」(七一巻

一号、二〇〇一年)

佐藤仁史「清末民初江南の地方エリートの民俗観―「歌

謡」をてがかりに」(七二巻二号、二〇〇三年)

巴兆祥(佐藤仁史訳)「清末郷土志考」(七三巻一号、

二〇〇四年)

岩間一弘「主婦と職業婦人のあいだ―両大戦間期中国に

おける都市中間層の形成」(七四巻三号、二〇〇六年)

山本 真「革命と福建地域社会―上杭県蛟洋地区の地域

エリート傅柏翠に着目して」(一九二六―一九三三)」

(七五巻四号、二〇〇七年)

夏 氷(佐藤仁史訳)「清末民初蘇州の民紳層とその

活動」(七六巻四号、二〇〇八年)

佐野 実「滬杭甬鉄道借款契約の実効性を巡るイギリス

と地方の関係―地方有力者層の対立・協力が中英間外

交に影響を及ぼした一事例について」(七八巻四号、

二〇〇九年)

木下恵二「一九三〇年代新疆盛世才政権下の「ソ連型」

民族政策とその政治的矛盾」(七八巻四号、二〇〇九年)

\*二〇一〇年代

吉田建一郎「二〇世紀前期の上海における日系製革企業  
―江南製革と中華皮革」（七九卷一／二号、二〇一〇  
年）

矢久保典良「日中戦争期の重慶における中国ムスリム団  
体の宗教活動とその特徴―中国回教救国協会とその重  
慶市分会を中心に」（七九卷一／二号、二〇一〇  
年）

湯川真樹江「満洲における米作の展開 一九一三―一九  
四五―満鉄農事試験場の業務とその変遷」（八〇巻四  
号、二〇一一年）

菊池秀明「太平天国の長沙攻撃をめぐる考察」（八一巻  
一／二号、二〇一二年）

菅野智博「北満洲における雇農と村落社会―満洲国期の  
農村実態調査資料に即して」（八一巻三号、二〇一二  
年）

藤井元博「重慶国民政府軍事委員会の「南進」対応をめ  
ぐる一考察―「中越関係」案を手がかりに」（八二巻四  
号、二〇一四年）

山本英史「近代蘇州基層社会復元の試み―鄉村管理者に  
関する聴き取り調査…附聴き取り記録」（八三巻四号、

二〇一五年）

戸部 健「Y M C Aアーカイヴズ（ミネソタ大学）所蔵  
中国Y M C A関係史料について―天津関係史料を中心  
に」（八四巻二／二／三／四号、二〇一四年）

矢久保典良「日中戦争時期の中国ムスリムにとつての憲  
政論―一九三九―一九四〇」（八四巻一／二／三／四  
号、二〇一四年）

山本 真「日中戦争時期、福建省における戦時総動員と  
地域社会」（八四巻二／二／三／四号、二〇一四年）

若泉もえな「近代中国地方政権史研究に関する覚書―陳  
炯明政権を中心に」（八六巻三号、二〇一六年）

持田洋平「康有為のシンガポール滞在（一九〇〇年）と  
その華人社会への影響に関する考察」（八七巻一／二  
号、二〇一七年）

大野絢也「南京国民政府期の経済建設と粵漢鉄道の事故  
多発問題―一九三六年の全線開通後を事例として」  
（八七巻四号、二〇一八年）

岩間一弘「序言 東アジアのなかの帝国日本―食の交流  
から考える」（八九巻三号、二〇二〇年）

藤原辰史「さつまいもと帝国日本」（八九巻三号、二〇  
二〇年）

前田廉孝「帝国日本の台湾・関東州塩需給と流通主体」  
一八九〇〜一九一〇年代を中心に」(八九巻三号、二〇二〇年)

渋谷裕子「台湾澎湖県における宮廟の社会的機能について―湖西郷南寮村の保寧宮を中心として」(八九巻四号、二〇二一年)

〔中国以外の東アジア史〕 計七篇

古田博司「朝鮮王朝前期葬喪礼教化政策」(六二巻一／二号、一九九二年)

和田正彦「松本信廣博士将来の安南本について(上)

(中)(下)・慶應義塾図書館・松本文庫所蔵安南本解題」(六二巻一／二、三号、六三巻一／二号、一九九二〜九三年)

可児弘明「朝鮮朝時代のタコ産出地について」(八一巻四号、二〇一三年)

可児弘明「李朝時代の葦魚について(追補)」(八二巻一／二号、二〇一三年)

吉原和男「二〇一二年三田史学会講演会企画の趣旨」  
(八三巻一号、二〇一四年)

重松伸司「一九世紀マラッカ海峡檳榔嶼史略―海峡植民

地における多民族社会の形成過程」(八三巻一号、二〇一四年)

上田 信「一五世紀前半におけるムスリムの海と中国―いわゆる鄭和下西洋をめぐって」(八三巻一号、二〇一四年)

〔中東・イスラーム世界史〕 計五七篇

\*一九九〇年代(一二篇)

古川 学「ニューデリーにおける図書館の情況」(五九巻二／三号、一九九〇年)

長谷部暢子「シャー・アッバース一世のギーラーン地方政策(一)」(五九巻四号、一九九〇年)

長谷部暢子「シャー・アッバース一世のギーラーン地方政策(二)」(六〇巻一号、一九九一年)

長谷部史彦「オスマン朝時代アレクサンドリア史研究の現状―サラハ・アハマド・ハリデーイー博士の法廷文書研究について」(六〇巻一号、一九九一年)

坂本 勉「イスラーム研究の系譜と慶應義塾(一)」(六〇巻二／三号、一九九一年)

三木 亘「イスラーム研究の系譜と慶應義塾(二)」(六〇巻二／三号、一九九一年)

三木 亘・岩見隆・湯川武・羽田功「シンポジウムこ  
とばの歴史生態学」(六二卷三三号、一九九三年)

坂本 勉「シンポジウム 文明語の比較社会史」→漢文、  
オスマン語、中世ラテン語」(六三卷三三号、一九九四  
年)

鈴木 董「オスマン語をめぐって―多言語帝国としての  
オスマン帝国と言語的共存」(六三卷三三号、一九九四  
年)

白岩一彦「一二世紀モンゴル社会における宗族と族譜―  
『集史』「チンギス・ハン祖先紀」をめぐって」(六四  
卷三／四号、一九九五年)

中村公則「ペルシャ文学と巡礼」(六四卷三／四号、一  
九九五年)

阿久津正幸「中世イスラム世界における教育施設マドラ  
サの政治的機能の再検討」(六九卷一号、一九九九年)

\*二〇〇〇年代(一七篇)

佐野東生「タキヤーザーデとイラン立憲思想(上)」(六九  
卷二号、二〇〇〇年)  
佐野東生「タキヤーザーデとイラン立憲思想(下)」(六九  
卷三／四号、二〇〇〇年)

宮武志郎「一五・一六世紀オスマン朝におけるユダヤ教  
徒宮廷侍医」(六九卷三／四号、二〇〇〇年)

田口 晶「オスマン・アラブ主義者のディレンマー」《盟  
約協会》一九一三―一九一八年」(七一巻一号、二〇  
〇一年)

石丸由美「オスマンルックとアルバニア人」『オスマ  
ン国民』理念の受容の問題をめぐって」(七一巻二／  
三号、二〇〇二年)

柳谷あゆみ「ザンギー朝二政権分立期の研究―モスル政  
権の動向から」(七一巻二／三号、二〇〇二年)  
長谷部史彦「ミナレットにおける異議申し立て―前近代  
アラブ都市の諸事例に関する覚書」(七二巻三／四号、  
二〇〇三年)

石丸由美「アルバニアの風景―国際南東欧学会第九回  
大会に出席して」(七三巻二／三号、二〇〇四年)

藤木健二「オスマン朝下の同職組合に関する研究動向と  
課題―イ・ウンジョンのイスタンブル研究に寄せて」  
(七三巻二／三号、二〇〇四年)

石原賢一「メフメット・エミーン・レスールザーデーあ  
る民族主義者の生涯と著作」(七四巻一／二号、二〇  
〇五年)

石原賢一「レストルザーデとイラン立憲革命」(七四巻三号、二〇〇六年)

山口元樹「アラウィー・イルシャーディー論争研究の視座」(七五巻一号、二〇〇六年)

イサム・R・ハムザ「日本における『アジア主義』」(七五巻一号、二〇〇六年)

メルトハン・デュンダル「一九三〇年代における日本のイスラーム政策とオスマン皇族」(七五巻二／三号、二〇〇七年)

遠藤健太郎「近代シリア派ウラマー研究の動向―イラン立憲革命期を中心に」(七七巻二／三号、二〇〇八年)

爲永憲司「モハンマド・ラマザーニーと『書物 Kitab』」(一九二〇年代のイランにおける書籍の出版状況をめぐって」(七八巻二／二号、二〇〇九年)

長谷部史彦「オスマン朝期マハッラ・クブラーの都市構造と社会―シャリーア法廷台帳史料に基づく予備的考察」(七八巻三号、二〇〇九年)

\*二〇一〇年代(二八篇)

藤木健二「オスマン朝下イスタンブルにおける食料・物資供給に関する一考察―ウスキュダルの皮革・果物・

花卉の供給を中心に」(七九巻一／二号、二〇一〇年)

坂本 勉「シンポジウム 井筒俊彦と前嶋信次―日本におけるイスラーム研究の源流を探る」(序言)(七九巻四号、二〇一〇年)

坂本 勉「イスラーム学事始めの頃の井筒俊彦」(七九巻四号、二〇一〇年)

杉田英明「前嶋信次『アラビアン・ナイト』原典訳への道」(七九巻四号、二〇一〇年)

家島彦一「いま、なぜ前嶋信次と井筒俊彦か」(七九巻四号、二〇一〇年)

湯川 武「中近世地中海地域のムスリムの旅人たち」(八〇巻二／三号、二〇一一年)

長谷部史彦「オスマン朝期マハッラ・クブラーのトゥライニー家三施設のワクフ」(八〇巻四号、二〇一一年)

坂本 勉「イランのタバコ・ボイコット運動とイスタンブル(上)」(八一巻一／二号、二〇一二年)

藤木健二「オスマン朝下イスタンブルにおけるイエディクレ周辺の皮鞣工と皮鞣工房群」(八一巻一／二号、二〇一二年)

坂本 勉「イランのタバコ・ボイコット運動とイスタンブル(下)」(八一巻三号、二〇一二年)

柳谷あゆみ「政権形成におけるヒドゥマの成立・解消・

維持―ザンギー朝の事例を中心に」(八一巻四号、二〇一三年)

〇一三年)

山口元樹「インドネシア独立後のアラブ人協会イルシ

ヤードの変容―国民国家形成期におけるアラブ人による同化・統合の動き」(八一巻四号、二〇一三年)

藤木健二「一八世紀イスタンブルにおける靴革流通と靴

革商組合」(八二巻三号、二〇一三年)

太田(塚田)絵里奈「後期マムルーク朝有力官僚の実像―

ザイン・アッリディーン・イブン・ムズヒルの家系と

経歴」(八三巻二〇三号、二〇一四年)

臼田雅之「タゴールとナシヨナリズム批判」(八四巻

一〇二〇三〇四号、二〇一五年)

太田(塚田)絵里奈「後期マムルーク朝有力官僚の実像

(二)―ザイン・アッリディーン・イブン・ムズヒルの

公務と慈善」(八四巻二〇二〇三〇四号、二〇一五年)

小野亮介「『新トルキスタン』誌におけるゼキ・ヴェリ

デイ・トガンの文化観とその背景」(八四巻一〇二〇

三〇四号、二〇一五年)

長谷部史彦「バルスバリー期カイロの食糧騒動」(八四

巻一〇二〇三〇四号、二〇一五年)

嘉納孝太郎「フェリッククス・ファブリの巡礼記にみるマ

ムルーク朝末期のドラゴマン」(八六巻一〇二〇二号、二〇一六年)

〇一六年)

杉山隆一「アフシャル朝ナーデル・シャールによるマシ

ユハドの都市開発整備事業」(八七巻一〇二〇二号、二〇一七年)

一七年)

尾崎貴久子「中世イスラーム世界の女性医療者」(八七

巻三号、二〇一八年)

藤木健二「近世オスマン帝国都市の慈善と救貧」(八七

巻三号、二〇一八年)

佐藤健太郎「宗派を越える慈善と救貧―アンダルス史の

視点から」(八七巻三号、二〇一八年)

長谷部史彦「一七世紀初頭のオスマン朝エジプト州総督

と祈願式―『マバーヒジュ』とその続篇に基づく寛

書」(八八巻二号、二〇一九年)

太田(塚田)絵里奈「後期マムルーク朝有力官僚と聖地―

ザイン・アッリディーン・イブン・ムズヒルの巡礼と

ハラマインにおける慈善」(八八巻二号、二〇一九年)

藤木健二「一八世紀イスタンブルにおける皮鞣工イブラ

ヒムの遺産とその相続」(八八巻三〇四号、二〇二〇

年)

尾崎貴久子「漢語イسلام医学書『回回藥方』と中世イ  
スラム医学書の関わりについて―第三十四卷折傷門の  
腹部損傷の記述から」(八八卷三／四号、二〇二〇年)  
長谷部史彦「計量と歴史記述―イブン・アジャミーに関  
する基礎的考察(一)」(八九卷一／二号、二〇二〇  
年)